

郷土学習資料「呑川は流れる」発刊にあたって

大田区教育委員会教育長 吉田 義雄

小中連絡協議会は昨年度、小中関連の郷土学習を推進するため大田区を調布、大森、蒲田の三地医に分け、それぞれの地域ごとに小中学校が協力して学区域に横切る郷土資料の調査研究を行ない、「小中学校における郷土学習—資料活用の手引—」第一集を発行した。

本年度は、この研究の継続として、第一集の資料と重複することをさげ、大田区を貫流する呑川に視点をあて、その流域に分布する小中学校29校に呑川流域の地理、歴史的研究をお願いし、児童、生徒の教育活動に役立つ郷土資料の収集と郷土学習の指導計画例を作成していただくことになった。

呑川はさして大河ではない。桜花の頃には今でも上流で花びらの流れを現出する。昭和の初め頃まではその下流に、のり舟の行きかう姿も見られ、呑川風物詩が懐かされるのである。都市化が進むにつれて、かつては、かんがい用水として利用されていた呑川も、住宅化、市街化とともに排水路としての意味を持つようになった。水底に緑の毛せんをうねらせていた水草も上流では見られるが、中下流では見られなくなってしまった。いつか郷土の川として住民の心に映じていたこの川の風物詩も失われていったのではあるまいか。

都市化が著しく進むと、この土地に育っている子どもたちにとっては、生れ故郷として「ふるさとは遠きにありて憶う」の意味での郷土は持っていない。郷土をもたない子どもたちにどうやって郷土学習をさせたらよいであろうか。ここでもうひとつの郷土があることを銘記すべきである。それは子ども達の身近かな地域としての郷土が大せつなのである。即ち子どもの眼にふれ耳にする諸事象を正確に観察するに必要な郷土である。

京都が、だれにも心をひかれるのは千年の都の人々の生活がそこに見出されるからである。東京は、日本の中心として四百年ぐらいにしかならないが、それでもそこに、東京の大地の上に行なわれた人間の生活のさまは、今後のわれわれの生活に役立つ理法と、なつかしさを十分もっている。以上の意味から、大田区の子どもの目にふれる身近かな地域」が郷土であり、そこには住民の生活の歴史があり、人々が生活の向上発展をめざしてきた願いが今の区民にひきつがれているのである。特に呑川の流域にはこのような資料が多い。